第440回
私の生き方

朝河平和学の地下水脈をたどる

聞き手
本誌　藤島　陽一

駒場の少数民族

――先生が中国研究にたずさわるようになったきっかけは何ですか。

矢吹　やはり時代でしょうね。いまの若い人たちはわからないと思います。私は一九五七年に高校を卒業したのですが、生徒会長をやって少し暴れたりしたものですから、見事に受験に落ち、一年浪人したんです。浪人中に『地下水道』というポーランド映画を観て、ソ連社会主義に懐疑を抱きました。

その頃のことで思い出すのは、四谷の主婦会館で「台湾共和国臨時亡命政府」の決起大会を覗いたことです。いまでは「台湾二・二八事件」（一九四七年）もかなり知られるようになりましたが、当時は戒厳令のもとでほとんど真相がわからなかった。その政治的意味もほとんどわからなかったのですが、これが台湾とのつきあいの原点です（初めて台湾を訪問したのは一九六九年のことで、いまは亡き戴國煇さんに同行した）。まあ、そんな浪人時代でした。

翌年、大学に入ったのですが、中国では人民公社運動が盛り上がり、その熱気が日本にも伝わり始めていました。駒場の教養学部には、工藤堇というちょっと風変わりな中国語の先生がおられ、第二外国語として中国語が選択できたので、私は面白半分に語学符号Eに丸をつけたのです。その年に中国語を選んだのは、二千人のうち十五人。こうして自称

「駒場の少数民族」になり、工藤師匠の取り巻きの一人になりました。

中国語を熱心に勉強したわけではないのですが、私は工藤先生に気に入られ、先生の鞄持ちで小豆島や九州阿蘇を旅行したり、あるいは旧制台北高校卒のOB会が小山捨月老師を囲んで開く伊豆への慰安旅行についていき、連歌の会に加わったりしました。「矢吹大将、ヒマならついて来ませんか」などと気楽に誘うほうも、誘われるとついていくほうも、実に奇妙な「師弟」関係でした。

工藤先生は東大病院の神経科に通っていたことがあります。土居健郎という『甘えの構造』を書いた神経科の先生がいますね。ある日、工藤先生に、「これから土居先生のところへ行くんだが、君どうですか」と誘われ、意味もわからずについて行ったのです。そうすると、お二人が漱石論の解釈をめぐって激しい議論を始めるんですよ。どちらが患者で、どちらが医者かわからない（笑）。いまではもう中身を覚えていないのですが、漱石がくしゃみをしそうな議論でした。私はあっけにとられて聞いていただけですが、実におもしろかったですね。

工藤先生のもとで中国語をまじめに学んだ記憶はないのですが、中国とどのようにつき合うべきかは、たたき込まれたように思います。戦前・戦中のヘイタイ・シナ語、ツウペン・シナ語に対する批判は激烈であり、日中

横浜市立大学名誉教授

矢吹 晋

やぶき すすむ：1938年福島県生まれ。東京大学経済学部卒。東洋経済新報記者、アジア経済研究所研究員を経て横浜市立大学教授。03年同名誉教授。中国経済論・現代中国論。著書に『鄧小平』『中国の権力システム』『日中の風穴』『ポーツマスから消された男――朝河貫一の日露戦争論』など。

相互理解のための中国語学習でなければならない、という教えは脳裏に刻まれた気分です。当時は中国研究を志すつもりはなく、ある意味では気楽な学生生活でした。

村のアジール

――福島県のご出身ですが、どちらですか。

矢吹 いまは合併して郡山市になっていますが、旧守山町です。守山藩という三万石の小藩があり、最後は水戸藩あずかりの天領でしたが、その前は二本松藩預かり、その前は会津藩預かりでした。

――一九三八年のお生まれですね。

矢吹 日中戦争が始まった翌年です。ですから、父の兄弟が一人、母の兄弟が一人戦死しています。従軍して復員した叔父・叔母もいます。郡山駅近くに保土ヶ谷化学の工場があり、戦争中は爆弾をつくっていたり、近くに飛行場があったので、激しい空襲を受けました。空襲の度に防空壕へ入るのですが、爆撃機を見たくて仕方がない。ときどき防空壕から抜け出して空を見上げ、叱られたのを覚えています。

――敗戦の年に小学校に入学される。

矢吹 当時は国民学校ですね。一九四五年の四月に入学して八月に敗戦、国民学校が小学校に変わりました。一年坊主ですから、古い軍国主義教育はほとんど受けていません。まだ新しい教科書はできないので、墨を一生懸命塗らされた世代です。

――ご両親のことを少し…。

矢吹 父は中学校の教師、母は小学校の教師でした。父は下手なバイオリンを弾いたり、村人のラジオを修理したりするのが得意で、酒は呑まない。とてもおとなしい性格でした。父方のほうは、私の祖父と伯父と二代続けて町の収入役をやった程度です。公金に手をつけるおそれはないと見られていたのでしょう（笑）。

母方のほうは代々神官で、初代は元和五（一六一九）年に大宮司の称号を得て、母の弟が十二代目でした。東大の史料編纂所にいた阿部善雄さんが書いた『駈入り農民史』という本があります。守山藩に残された「御用留帳」という陣屋日誌をもとに江戸時代の農

民生活を描いたものです。「アジール」「駆込寺」の話はよく知られていますが、私の村では母方の首船神社に駆け込んだのです。

子供の頃、阿武隈川のすぐ側の母の実家へよく行きましたが、仏壇に位牌がたくさんあり、中には親戚のものではない位牌さえありました。「駆け込んだまま一生を終えた人たちの位牌だ」と聞かされました。私は母の昔話を半信半疑で聞いていたのですが、阿部さんの本に神官遠藤奥守や遠藤無位がしばしば登場するのを見て、ようやく史実と確認した次第です。

玄祖父・遠藤正範は幕末に京都で吉田良方に国学を学びました。『田村郡郷土史』には、「明治維新ノ初メ奥羽列藩同盟朝命ニ抗スルノ約アルニ及ビ、正範憤然トシテ藩主松平侯ニ説クニ、勤皇ノ大義ヲ以テス。遂ニ先鋒旗ヲ賜ヒ、兵ヲ募リ軍ニ従ハシム。正範東奔西走極メテ心力ヲ勞ス。因テ病ヲ得テ終ニ歿ス。時ニ年四十四。實ニ明治元年七月二十一日ナリ」と記されています。その弟は西南戦争に従軍して田原坂で戦死したのですが、わずか十七歳でした。

「朝河桜」の伝説

――お母さまはどんな方でしたか。

矢吹　母の弟・遠藤正二は、旧守山町の町長、郡山市の助役をやったあと県会議員に出て、議長を二期務めて引退。母は叔父の選挙のたびに応援演説をやったり、非常に活発で、人づき合いの得意な女性でした。この六月に九十二歳で亡くなったばかりですが、私は母方の性格を引き継いでいるのかもしれませんね（笑）。

――中村敦夫さんは従兄弟だそうですね。

矢吹　敦夫は母の兄の子供です。

――高校はどちらですか。

矢吹　安積高校です。福島県で一番古い高校で旧制福島県立尋常中学校。私は七十期生です。一期生に高山樗牛、四期生に朝河貫一がいます。卒業生代表に高山樗牛賞を贈る伝統があり、私はそれを得たのですが、私が卒業した翌年、朝河賞が創設されました。できたら朝河賞のほうが欲しかったですね（笑）。

校庭に「朝河桜」という桜の木がありま

す。朝河は英和辞書を毎日二頁ずつ暗記して、暗記した頁を食べた。最後に残った革表紙を桜の根元に埋めたという朝河伝説をよく聞かされました。われわれは「紙を食うなんて山羊みたいな先輩だね」と笑っていたものです。のちに阿部善雄さんが書いた『最後の日本人』を読んで、「辞書を食べる」意味を考え、『節用集』を食べた西依成斎を想起し、朝河理解の第一歩を歩みだしました。

——生徒会長として暴れたというのは…。

矢吹　旧悪を告白するのは恥ずかしいですね。当時の佐藤広治校長は非常に真面目な方でしたが、受験優先でクラブ活動に制限を加えるような動きがあり、その結果、生徒会の乱暴者たちとぶつかっていました。そこで卒業式に際して「答辞」を述べる機会をとらえて、校長の教育方針には賛成しがたい、教育の本質にもとるのではないか、と青二才の意見を述べたのです（笑）。

私の後継生徒会長が、今度、福島県知事を辞任した佐藤栄佐久君です。佐藤が後輩を代表して「送辞」を述べ、私が卒業生として「答辞」を述べた。伯父の通夜の席で、佐藤が私をからかって、「矢吹さんは、あの頃暴れてましたね。いまは私が暴れています」とか言っていました。今回の談合事件のことは何も知りませんが、私には「佐藤の暴れ」を突かれた気がしてならない。

デモ暮らしの日々

——大学時代は六〇年安保ですね。

矢吹　六〇年安保の年に経済学部に進んで、大内力先生の農業経済学のゼミに入れてもらい、農村調査にも行きました。ゼミには顔を出しましたが、あとはほとんど講義に出ず、「デモ暮らし」の毎日という感じですね。怠け学生は別に私だけではなく、授業には出ずにデモに行くのを自慢する雰囲気でした。古きよき時代の牧歌的デモですから、せいぜい警官隊から殴られるくらい。機動隊員三人にはがい締めにされて、もう一人から顔面を殴打されたときは、かなり痛かったけれどもね（笑）。しかし、相手は素手なので、怪我しなかったのは幸いでした。

——六月十五日は国会へ…。

矢吹　もちろん行きました。樺美智子さんは、私のすぐ後ろでスクラムを組んでいた。前列は門扉を壊すためにばらばらになってしまって、結果的に樺さんは最前列になっていたんです。そこで細い首を大きな手で押されて、気を失って倒れたところを踏まれたというのが私の理解です。

樺さんからはだいぶ折伏を受けました。彼女との議論でよく覚えているのはこういう話題です。中国研究会に入った理由を問われた私が、「中国との国交正常化、戦後処理が大事だ。中国と友好的な関係をつくらなければいけない」と答えると、彼女から鋭く反論されました。「日本で革命を起こさなければ、革命に成功した中国人民との友好はあり得ない」「資本主義体制と社会主義体制の友好」とはナンセンスである。まず革命を起こすことが前提であり、現状において友好を叫ぶ行為は自民党政府を利するもので、むしろ反革命に近い。これが彼女の主張でした。意見は一致しなかったのですが、ビラ撒きなどにはしぶしぶ協力したので、わりあい、いい先輩・後輩関係でした。

冷やかしのつもりだった

――卒業後、東洋経済に入社されたのはジャーナリストを志して…。

矢吹　いや、何をやるか迷っていました。就職か、それとも留年か、フラフラしていた。ちょうど高度成長が始まったときで、売り手市場でしたが、民間会社に入って歯車の一つとして働くのもつまらない。さあどうするか。ある時、大内先生から「君はどうするんですか」と聞かれました。「実は東洋経済から、推薦してほしいと言ってきている。君が行くなら紹介しますよ」と。「じゃあ行ってみましょうか」と、冷やかしのつもりで面接に行ったら、出てこられたのが原田運治さんでした。原田さんは当時東洋経済の専務で、淡路島出身、大内兵衛先生の教え子です。

原田さんが私の顔を見て、「君は旗を振ったほうかね」と聞く。「一生懸命振りました」ではまずいだろうと思い、「人並みに」と答えたら、ニヤッとした。「経済雑誌をつくることに興味があるなら来なさい」。それ

工藤篁先生のもとで、中国とどのようにつき合うべきかを、たたき込まれたように思います。

で決まり。試験も何もない。

あとで型通り興信所から電話が来て、「君の調査報告はどう書いたらいいか」とおかしなことを聞くんですよ（笑）。そこでデモには行かず、マージャン専科のような友達の住所を教えて、「この友達に聞いてください」と言って、おしまい。実に牧歌的な時代でした。ただ、友人には逮捕歴をもつ勇士も少なくなく、そういう連中は就職が難しかったので、大学院へ行ったんですね。

石橋湛山の頭をなでる

――東洋経済というと石橋湛山ですが、謦咳に接したことは…。

矢吹　『東洋経済』には「今週の問題」という匿名座談会があって、石橋老や三浦老（三浦銕太郎）は座談会の常連でした。新人の私の仕事は、座談会への出席を依頼し出欠を確認、速記録を整理し原稿の形にして、毎週印刷所まで校正に出向くことでした。石橋さんは半身不随でしたが、よく座談会に来られた。ほとんど発言はされませんでしたけれどね。司会役が石橋さんの秘書を長く務めた大原万平さんで、「石橋先生、どうですか」と問い質すと、ようやく「あのときはこういうことだった」というような話をする。それを除くと、自分の意見を積極的に述べるという感じではありませんでした。

実は、私は石橋さんの頭をなでたことがあるんですよ（笑）。石橋さんが帰られるときは車までお送りするのですが、いつも運転手さんがドアを開けて、頭がぶつからないように屋根のところに手を当てるんです。あるとき運転手が急な電話で呼び出され、石橋さんは車に向かってとことこ歩いて行っちゃった。これはまずいと思って、とっさに運転手さんのまねをして、車のドアの受け手に手をあてたんです。そしたら石橋さんの禿頭があたってツルリとしてね（笑）。そんな得難い体験も味わいました。

この座談会には三浦銕太郎さんもよく同席されました。小柄な方で、もう九十歳を越しておられたけれど、いつも和服姿で、人の話を黙って聞いていた。本当に古武士という感じでしたね。

〝小日本主義〟の人脈

――三浦銕太郎は石橋湛山の前の東洋経済の社長ですね。

矢吹 これはつい去年調べて『自由思想』（〇五年十一月号）に書いたのですが、三浦銕太郎（旧姓山下）は東京専門学校（現早稲田大学）で、朝河の一つ下なのです。学科は違いますが、当時は二百人ぐらいしかいないわけで、お互いに知っていた可能性が強い。

もう一つ、山下は静岡藩士の伜ですが、わざわざ戊辰の役で没落した旧二本松藩藩士の家に婿入りしている。相手は女学校の教師をしていた三浦貞です。山下は結婚後、貞の教え子梅子を石橋湛山の嫁さんとして紹介し、媒酌した。三浦夫妻には子供がないこともあって、石橋を自分の子供のように家庭を持たせ、社長ポストを早めに譲るんですね。

三浦銕太郎は『小日本主義』を書いて有名です。三浦・石橋両人はそういう形で、家族ぐるみで結ばれていた。そして『東洋経済』で日本の大陸政策を批判して、満州なんてかえって邪魔だ、「小日本を選べ」という論陣を張りました。

朝河貫一がアメリカで考えていた思想も、酷似しています。朝河は一九〇九年に『日本の禍機』を書いて以後、時事評論をやめて歴史研究に打ち込みます。三浦や石橋が本格的に日本の大陸政策を批判するのはそのあとですから、時期的にはズレますが、基本的な考え方は酷似している。

実は、朝河は日露戦争前夜に『The Russo-Japanese Conflict』（『日露衝突』）という本を書き、ポーツマス講和会議のときは、ポーツマスのウェントワースホテルに二週間泊り込んで交渉の成り行きを見守り、「ロシアから賠償をとってはいけない」というようなことを新聞記者に語っています。

日露戦争後、日本は帝国主義国家として中国大陸に進出するわけですが、朝河はこれを厳しく批判しました。また朝鮮併合のときは、「朝鮮が弱いからロシアにとられる。それが心配だ」というのなら、むしろ「朝鮮の経済的復興を助けよ。そして朝鮮が自立できれば、日本にとっては一番の安全保障の衝立

になる」と言っています。

朝河＝三浦＝石橋、いずれも東京専門学校の出身で、そこに一つ思想的な接点がある。もう一つの接点が福島県です。私はそれを「小日本主義の人脈」「朝河平和学に連なる人脈」と言っています。そういう日露戦争以後の日本の思想的地下水脈を発掘していくと、これからの日本がアジアの人々とうまくつき合っていく上で教訓が得られるのではないかと、私は思っています。

石橋老の高い見識

――石橋湛山は戦後の日中交流再開にも力を尽くしましたね。

矢吹　石橋さんが中国へ行って毛沢東や周恩来と会って、いろんな話をしたことは座談会で語っていました。毛沢東が石橋のために書いた魏の曹操の「老驥は櫪に伏すも志はなお千里にあり」という揮毫があります。その書が下落合の石橋さんの家に飾ってあるのを、お宅にお邪魔して見せてもらったことがある。入社三年目、一九六五年のことです。

石橋さんは老骨にむち打って中国へ行った。そういう石橋さんを、私は偶然ですが、身近で見ていました。石橋さんは、日本と中国は兄弟のようにつき合わなければいかんと言っています。いわゆる石橋構想ですね。当時、米ソ冷戦体制の中で、日本と中国は自由陣営と共産陣営に分かれて対峙していた。そういう厳しい国際環境のなかで石橋老は、日中米ソ四カ国の平和条約を結べと主張していたのです（『全集』所収）。当時、私は生意気にも、空論じゃないかと感じていたのですが、いまになってみると、そういう時期でさえ理想を掲げていた石橋湛山老は実に見識の高い政治家であったと感じます。

いまはポスト冷戦で、両体制間の大きな枠はなくなった。それにもかかわらず、あるいはそれだからこそ、小さなナショナリズムで日本と中国、日本と韓国が争っている。かつて厳しい冷戦体制のもとでさえ、理想を追求した政治が日本にあった。いまの政治は実に愚劣だという感じがしますね。ほとんどヤクザのような政治家によってナショナリズムが煽られている。憂慮すべき事態です。

石橋湛山は老骨に鞭打って中国へ行った。そういう石橋さんを私は身近で見ていました。

――またあちらにも毛沢東とか周恩来がいたんですね。

矢吹　そうです。両方に大物がいて、そういう関係をつくろうと努力していた。いまは、どこもみんな小物になって、国内の人気取りに熱中するのみ。外に敵をつくってナショナリズムを煽り立て、国内の団結を辛うじて維持し、あるいは選挙に勝とうとしている。政治のレベルが落ちるところまで落ちた。

何が中国の真実なのか？

――矢吹さんが東洋経済に入社した一九六二年は、断絶していた日中交流がLT貿易で再び動きだした頃ですね。

矢吹　廖承志・高碕達之助のLT覚書貿易協定に基づいて来日した中国の記者たちが、東洋経済にも出入りするようになりました。大原さんは私が中国語をかじっていたことを知っていて、中国記者団随行を命じたのです。日本経済の実情を知ってもらうために、彼らを工場に案内したり、宿舎に招かれて中国の家庭料理をごちそうになったり、中国の記者たちとは、数年ですが、だいぶつき合いました。

そうこうするうちに中国で文化大革命が始まって、彼らとの交流が途絶えた。中国で何が起こりつつあるのか。私は中国のことをもっと勉強したくなって、アジア経済研究所に移ったのです。

――文革が始まったのは一九六六年の夏でした。今年は文革が始まって四十年、文革が終わって三十年の節目ですが、中国ではあまり話題にならないようですね。

矢吹　それは、話題にしたくないからです。文化大革命というのは加害・被害関係が入り組んでいて、みんなおれも被害者だと声をあげるけれども、実は被害者であると同時に加害者でもあった。ですから、この問題を扱うのは非常に難しいのです。

そこで時代を一つずらして、日中戦争に持って行く。そうするとこれは敵の正体がはっきりしていて、説明しやすい。中国のいわゆる「反日政策」や「愛国主義教育」の裏には、近い過去である「文化大革命から目をそらす」という面もありますね。これは中国に

とっても非常によくない。文革の歴史を直視しない限り、それを歴史の教訓とすることはできません。次の局面を開けないはずです。

――文革中は中国情報も入ってこなかったと思いますが…。

矢吹　アジア経済研究所に移って中国研究を始めたけれど、情報がほとんど入らないわけです。中国はソ連型の社会主義を越えるという文化大革命の精神には共感する面がある。一方で、度重なる武闘事件や林彪事件などネガティブな面もあり、どうも理念どおりには行っていないこともわかってきた。あの頃は私自身、何が中国の真実なのか迷っていました。

そのあと一九七一年から七三年にかけて、アジア経済研究所から派遣されてシンガポール南洋大学と香港大学で二年遊学するのですが、そのあいだにニクソン訪中があり、田中訪中があったわけです。

「風は南から吹く」

――三十年前の一九七六年は一月に周恩来が死去、四月に第一次天安門事件、九月に毛沢東が死んで、十月の四人組逮捕で文革が終息する。大激動の年として印象に残っています。

矢吹　その年に私は横浜市立大学に移りました。大学で教え始めた途端に毛沢東が死んで、流れが逆転した。これはどう考えたらよいのか、かなり深刻に悩みました。

私なりの展望を得たのは、一九七九年から八〇年にかけて、香港領事館の特別研究員として香港に滞在しているときです。つまり、毛沢東の路線は完全に破産していた。だから鄧小平が路線を転換しようとしている。転換後の方向は「対外開放、市場経済」しかあり得ないと、私はすぐに理解できたのです。

なぜかと言うと、私は七一年にシンガポールへ行って華僑社会の現実を観察していた。香港でも香港経済が非常に活性化しているのを見ていた。台湾にも何度か行って台湾経済の発展ぶりを見ていました。私はいわばシンガポール、香港、台湾から大陸を見ていたわけです。そうすると、大陸でこれからやろうとしていることの意味が見えてくる。要するに、シンガポールのまね、香港のまね、台湾

のまねだということが感覚的にわかったんですね。

それで私は「(改革開放の)風は南から吹く」というキャッチコピーを考えた。これは絶対に後戻りできない市場経済への動きだということをほとんど当初から確信しました。当時の中国は、「市場経済は部分的に導入するだけであり、計画経済の本体は守る」と強調していたけれども、それは建前にすぎないことを見破ったつもりでした。以後、その視点から中国の動きを見守ってきました。

政治改革の遅れと汚職の蔓延

——自由主義経済と民主主義は対になっていると考えるんですけれども……。

矢吹 そのとおりですね。戦前の日本を考えてください。政治は治安維持法のもとで非常に強権的でした。しかし、経済は富国強兵でがんばった。戦後、ようやく一致するわけです。戦後復興、高度成長に対応して政治も民主化していった。「経済が先行発展して、政治民主化があとを追いかける」という構図は台湾がそうです。韓国も同じですね。

脱冷戦期のソ連の場合、先に民主化をやって大混乱に陥った。中国の場合は、経済をまず発展させて、民衆の胃袋を満たして、それから民主化へという戦略だと見ています。結局、最終的に市場経済と相性がいいのは民主主義しかあり得ない。民主化は不可避で、いずれ中国もこれに取り組むでしょう。

ただ、現在のギャップはあまりにも大き過ぎますね。経済のほうは高度成長して、サイズも大きくなってきたけれども、政治体制は全然対応し得ていない。これは一つは一九八九年の天安門事件の後遺症です。しかし、もっと大きいのは旧ソ連の解体ですね。ソ連東欧の崩壊を見て、「明日は我が身」と思うのは当然で、体制の引き締めに転じたわけです。

九一年にベルリンの壁が崩壊したときは、まだ鄧小平が陣頭指揮していました。九四年に鄧小平が引退して、江沢民が実権を掌握する。この頃から中国のスタンスがおかしくなります。加えてアジア通貨危機があった。旧ソ連解体とアジア通貨危機の衝撃を受けて、内へ籠もるようになるんです。大きな流れは

改革・開放、世界経済の中へということなんだけれども、一方では、世界には狼も虎もいて、非常に怖い。

そのため、先行した経済と遅れた政治との股裂きがひどくなっています。鄧小平のような有能な指導者であれば、このギャップを近づけられたと思う。彼は経済が先だが、しかし、政治もそれにあまり遅れないように前進しなければいけないと考え、「政治体制改革」を繰り返し強調していました。

ところが江沢民は、はっきり言って能力がないために、内憂外患のもとで思い切って政治体制改革をやれなかった。必要以上に萎縮して、ひたすら共産党の独裁体制を守ろうとした。その結果が汚職の蔓延です。政治改革の遅れがそういう形で出ている。最近、上海市党書記陳良宇が解任され、軟禁されています。陳良宇のボスは黄菊副首相であり、黄菊は江沢民の側近です。

江沢民政権の功罪点検

——それは胡錦濤主席が来年秋の党大会に向けて権力闘争に勝ちつつあるということですか。

矢吹　その通りです。本当は江沢民は二〇〇二年の党大会ですっぱり身を退くべきだった。ところが、後継者による汚職摘発を恐れて、摘発を妨害できるような政治局の人事配置をやった。その結果、近年の中国政治は江沢民「会長派」と胡錦濤「社長派」が対立する二元指導部になっていました。いわば「二つの司令部」があった。会長派と社長派が争っていたので、下のほうは上の言うことを聞かない。去年の反日デモをめぐる混乱は、それをよく象徴しています。この状況については、江沢民は大きな責任がある。江沢民長期政権の功罪点検は、避けられません。

——日中関係の悪化は、靖国参拝を六年続けた小泉さんにも大きな責任がありますね。

矢吹　小泉内閣の「負の遺産」は、きわめて大きいですね。石橋湛山は戦争に負けた一九四五年に、「靖国神社を廃止せよ」と『東洋経済』の社説に書いています（『全集』十三巻所収）。靖国を担いでいるあいだは、日本は中国や韓国と仲よくできない。靖国はさっぱりと整理して、その上で新しい関係をつくろ

自分の国の歴史、相手の国の歴史を知ることが平和につながるというのが朝河の考え方です。

うと主張した。格調高い考え方です。

いま日本人は非常に混乱していますね。小泉さんの八・一五参拝をめぐって、事前の世論調査では「行くべきではない」が多数だったのに、参拝後は「行ってよかった」が多数になっている。同じ国民が右へ左へ揺れている。世論が分裂しているというより、みんな、わけがわからなくなっているんじゃないでしょうか。

安倍新政権と日中関係

——安倍首相は就任早々、中韓両国を訪れて首脳会談を行いましたが…。

矢吹　昨年秋から、特に今春以降、安倍さんが総理就任を意識して、水面下で中国との接触を続けていることには注目していましたが、就任直後の首脳会談が実現したのは予想外でした。つまり、谷内外務次官と戴秉国次官との「戦略対話」、中川秀直氏訪中などの伏線が生きてきたわけです。

日中・日韓二つの首脳会談が成功したのは、それぞれの国内事情もからんでいますね。安倍内閣の発足の前夜に、胡錦濤氏が陳良宇上海市書記の解任・上海閥の解体に成功し、内外政策においてフリーハンドを得たことが大きい。安倍流の「靖国曖昧」戦術を保持したままでの訪中受入れを決断したのは、胡錦濤であり、彼の指導力強化を意味します。しかし、「靖国参拝」を「中日間の政治的障害」と見る立場は変えていないので、安倍さんの「適切な処理」が参拝を意味するならば、即座に崩れる危うさを含んだままでの日中関係ですね。北朝鮮の核実験声明など日中韓が共同で対処すべき緊急課題が浮上しており、安倍さんは当面参拝よりも、近隣関係改善を優先したのでしょう。

——党三役を見ると、中川秀直幹事長はともかく、政調会長が中川昭一さんですね。

矢吹　昭一氏は経産大臣のとき、東シナ海のガス田問題で派手に煽ったでしょう。その後、経産大臣が二階さんになったら、鎮静化した。あれは閣僚の人事次第でこれだけ違うという、実にいい例ではないか。秀直氏は春に中国を訪問し、安倍訪中の根回しをやりました。二人の中川のどちらに傾斜するか、そ

れが見どころかもしれない。

――気がかりなところです。

矢吹　日中間にはもともと深刻な利害対立があるわけではない。日本が掘ったところで、そのガスは日本に運びようがないのです。中国の日系企業に使ってもらうとか、そういう話をするしかない。それを日本の重大な経済権益が失われるというような調子で煽るのは、程度の悪い政治家ですね。そういう愚劣な政治家が煽ると、中国のほうでも同じように、日本人は嘘つきで信用できないという妙な議論が出てくる。

日本と中国はそれなりにつき合っているのですが、他方ではお互いに疑心暗鬼があって、日本で中国嫌いが大きな声を上げると、中国でもまた日本嫌いが騒ぎ出す。日本の中国嫌いと中国の日本嫌い、嫌い同士が喧嘩しているわけです。多くの人たちは、そうじゃないですね。「反中派」「反日派」だけが大きな声を上げている。実に不毛な関係です。

田中角栄と毛沢東あるいは周恩来が国交正常化をやったときは逆なんです。お互いいろいろ不満はあるけれども、これから仲よくしようということで握手している。いまはその原点が後方に退いて、互いにあれやこれやの不満の言い放し。これは子供の喧嘩で、私は日本も中国も同罪だと思っています。

欧州統合の教訓

――ある世論調査によると、中国人に親しみを感じない日本人は三八%、日本人に親しみを感じない中国人は六三%だそうです。

矢吹　こういうことですよ。日本がそういう統計を出すと、中国側も実はおれのほうがもっと日本を嫌っているぞ、という数字を出すんです（笑）。

もう一つ、親近感という表現の定義問題がある。中国語の「親近感（チンジンガン）」は、日本語の親近感よりもちょっと強くて、親戚づき合いぐらいの意味がある。そこまでの気持ちは日本人に対して持たない。そんなことを聞くこと自体がおかしいじゃないかというのが、中国人の普通の感覚です。なまじ言葉が近いために誤解があるんですね。

――一衣帯水と言いますが難しいですね。

矢吹　二〇〇〇年に「ヨーロッパ統合と日本」というシンポジウムをやったんです。私が責任者で、この前亡くなった阿部謹也さんが総括の報告をやってくれたのですが、かなり中身の濃いシンポジウムができました。

一般にはヨーロッパで統合ができたのは、国民国家のサイズが似ている、キリスト教という価値観を共有している、あるいは陸続きだからと言われているけれども、それらは大きな理由ではない。一番大事なことは、戦争はもうできないということなんです。核兵器はオーバーキル状態で、これを使ったらヨーロッパは全滅する。だから戦争という選択肢を排除して問題の解決を図るしかない。「平和のため」「戦争はもうできない」というのがヨーロッパ統合です。こう考えれば、アジアだって同じ事情ですよ。日本は、いまやっている反アジア政策の逆をやればいい。

——欧州統合は石炭から始まった。だから東シナ海のガス田は逆に好機かも…。

矢吹　そうです。ロンドン大学の森嶋通夫さんが亡くなる前に「東アジア共同体」を提唱しましたが、例えばエネルギーについて、東アジア全体の持続的発展を考えて、そのために共同で開発するとか備蓄することを考える。食糧も同じですね。それが安全保障としては一番大事で、核兵器なんて本当の安全保障にならない。むしろ、危険を増やす措置です。軍事力も必要ですが、それを中心に据えるのではなく、平和的な関係をつくるための努力をもっとやらなければいけない。

ところが、ニューヨーク・テロ以後は、平和協力ということが吹っ飛んで、ブッシュ政権がやっているのは、ひたすら報復だけですね。それは次の報復を生むだけです。そういう雰囲気に感染して、日本は北朝鮮の拉致問題をことさらに騒ぎ立てている。外国の友人は言いますよ、日本は拉致問題にハイジャックされたのかと。拉致以外に日本の外交はないのかと批判しています。

歴史学イコール平和学

——現状を乗り越えるためには…。

矢吹　私は定年で大学をやめてから朝河貫一のことを調べていて、一年目に彼が英語で書

いた『入来文書』を、二年目に『大化改新』を翻訳しました。来年、もう一冊『比較封建社会』を出しておしまいにするつもりです。

私は、日本は朝河の歴史学、真の歴史認識を無視してきたために、歴史問題を解決できないのではないかと考えています。歴史問題と言うと、日清戦争あるいは日露戦争以来の日本と中国、あるいは日本と朝鮮との関係だけを議論している面がありますが、それは一つの段階にすぎない。朝河のようにもっと遡って、大化の改新で日本がいかに中国から学んだか。それで国家を形成して、その中でまた日本民族がいかに自らを形成してきたか。朝河によれば、日本は隣にあるすぐれた文明を咀嚼して自分の文化をつくってきた人類史的に見ても非常にいい例なんです。

この文脈では、日本の歴史全体を見直すことが、「経済発展の優等生」という局面だけではなく、日本人の資質とか国民性ということを含めて一番の自己認識になる。それが十分にできれば、今度は開かれた目で韓国、中国、あるいは他の諸国を見ることができ、真の歴史認識ができるのではないか。つまり「世界人類の視点に立った日本史像の再構築」です。

朝河史学の裏は朝河平和学になります。朝河は戊辰の役に始まり、日清・日露、第一次・第二次大戦と、文字どおり戦争の世紀に生きて、最後はアメリカという「敵国」で亡くなった人です。彼にとって平和は、個人としても、歴史家としても切実な問題でした。なぜ国家や国民は争うのか。「相手をよく知らないからだ」と彼は言います。相手をよく知る。それは当然、自分をよく知ることでもある。お互いに相手をよく知ったら、戦争にはまずならない。自分の国の歴史、相手の国の歴史を徹底的に分析することが平和につながるという考え方です。

朝河は自国の歴史学を人類史、あるいは人類発達史のなかに位置づけよ、と強調しています。朝河にとって歴史学イコール平和学なんですね。最後に朝河の箴言を一つ。「外交とは、相手の精神への理解を通して、自らの目標を獲得することである」。昨今の東アジア外交は、朝河の精神とはまるで反対です。

――ありがとうございました。